

シンポジウム

「東アジア文化地図の共有に向けて—感情記憶をどのように描くか」 はじめに

岩崎 稔

ここにその記録を収録したシンポジウム「東アジア文化地図の共有に向けて—感情記憶をどのように描くか」は、科学研究費補助金 基盤研究 (A)「近現代世界の自画像形成に作用する《集合的記憶》の学際的研究」(研究代表者: 岩崎稔)と、トヨタ財団研究助成プログラム「東アジアの新たなコモンとは何か—現代の《民主》と《主権》の概念をめぐる日中共同研究」(研究代表者: 小森陽一)を基盤として、しかも東アジア出版人会議が定例的に東アジアを循環しながら続けてきている企画の第十三回目という意味も持たせながら、2012年5月25日に東京外国語大学大会議室で開催されたものである。それぞれのプロジェクトでコツコツ積み上げられてきた成果を持ち寄ることにはなるわけだが、「東アジアの公共空間において、歴史認識と感情記憶の問題がどのようにせめぎ合うのか」、「日中の今日の厳しい外交関係や領土問題を背景にしながら、そこにある《民主主義》や《公共性》の構築をめぐる基礎概念や手法にどのような差異があるのか」、また「こうした対立と対話のなかで、いかに読書共同体を構築していくべきなのか」という問いを、このシンポジウムのタイトルにある「東アジアの文化地図の共有」という課題として設定して、さらに新しい出会いと融合を企んだのであった。この会議のために、日本各地はもとより、中国、韓国、香港、台湾の5つの国や地域から、研究者と編集者や出版人が集まって、延べ参加者は100人を超えた。

会議では、冒頭で東アジア出版人会議議長である薫秀玉先生のスピーチがあり、それに対して、東京外国語大学の学長として挨拶した亀山郁夫先生が次のように応じられたが、それはこの会議に臨む主催者の気持ちをかなり適格に把握してくださっているので、少しく引かせていただく。

「あらためて申すまでもなく、東アジアの結びつきは、この二十年間に飛躍的に発展を見してきました。グローバル化とひとことで表現される変化は、もちろん相互に恵み多い変化であることには違いありませんが、同時に、お互いの歴史や位置によって、ささやかなきっかけで誤解や行き違いを生み出してしまう危険な可能性も含んでいます。そうした不幸を避けるためには、政治的、経済的な利害や主張だけではなく、まさに東アジアの広義の漢字文化圏に属し、圧倒的に豊かな伝統と記憶につながっているというわたしたちの共有文化の厚みこそが、役に立ちます。それは、お互いに率直に意見を交換するにあたって、相互理解のための盤石の基盤になりうるものです。金融パワー、政治的交渉、工業力の躍進だけではなく、人文知とその媒介となる出版メディアの発展もまた、東アジアのグローバル化のもっとも実りある成果であり、さらなる発展の前提でありましょう。そうした点で、みなさんがアジアを移動しながら、いたるところで文化の媒介者の役割をはたしてくださっていることは、実に頼もしいかぎりです」。

亀山学長は、ドストエフスキー作品の翻訳者、研究者として東アジアでつとに有名であるとともに、人文出版のために東京外国語大学出版会を創設した方でもあるから、このシンポジウムの趣旨に深いかかわりをもっている。

会議は、加藤敬事氏(みすず書房元社長)や熊沢敏之氏(筑摩書房社長)の司会で手際よく進められた。基調講演として、孫歌教授(中国社会科学院文学研究所)が「われわれはなぜ東アジアを語るか」と問いかけて、まずは全体の議論のプラットフォームを作り上げてくださったが、それを受けて展開されたそれぞれの報告は、以下のとおりである。

第一報告

「戦後日本は「原子炉」をどのように受け入れたか」 龍澤武（東アジア出版人会議理事）

コメント 高橋哲哉（東京大学教授）

第二報告

「脱植民地化—台湾史再構築の複雑な経験」 林載爵（台湾・聯経出版発行人兼編集長）

コメント 丸川哲史（明治大学教授）

第三報告

「韓流の構造社会的認識および東アジア‘物語’共同体の可能性」 韓性峰（韓国・東アジア出版社社長）

コメント 高榮蘭（日本大学准教授）

第四報告

「大国の若者たちはどこに向かうか」 劉蘇里（北京万聖書園図書有限責任公司取締役）

コメント 岩崎稔（東京外国語大学教授）

さらにその後、これらの報告とコメントを前提として、ラウンドテーブル形式の全体討議があり、そのパネラーとしては董秀玉（中国編集学会副会長・東アジア出版人会議会長）、林載爵（東アジア出版人会議副会長）、金彦鎬（韓国・ハングル社社長）、林慶澤（全北大学校人文大学教授）、大塚信一（東アジア出版人会議最高顧問）らも登壇した。本誌には、ラウンドテーブルでの議論以外のすべてを収録した。

なお、この会議では日本語、中国語、韓国語、英語という三つの言語が、ときおり英語も差し挟みながら行きかったが、異なった言語文化の懸け橋として奮闘してくださったのは、東京外国語大学大学院生の金閨愛さん、東京大学大学院生の趙真慧さん、天津外国語大学大学院生の陳希さん、于婷芳さん、一橋大学大学院生の譚仁岸さん、そしてコーネル大学大学院生の黄珮亮さんたちからなる通訳チームであった。実り多い国際会議のつねであるが、かれらの貢献はたんに言葉の媒介だけでなく、感受性や経験そのものの伝達にもあったことを最後に付言しておきたい。